

此の頃思う事、考える事

徳弘 公子

平成二十五年 癸巳年

元旦から穏やかな新年を迎えた。一月はお決まりの如く急ぎ足で過ぎ去ろうとしていた。その日明るいニュース、春の選抜高校野球に出場が決まった、二十年振りで母校土佐高校が選ばれた。当然無関心では居られないうれしい出来事である。幸せな気分で予定の行事をクリアーし一月は終わった。

二月四日は立春大吉、何か新しい事を試みてみたい、昨夜の豆まきは省略、成田山の豆まきは有名である。

三月三日、ひな祭り、この頃は耳の日で補聴器のお話に耳を傾けている。

四月此の月は、父方の叔母が親戚最後の長命を全うした。今、私自身も老いの坂を登りつゝ彼女の生き様に敬意を表したい。

五月三、四、五、六日大型連休、外出は控えておこう、休養、休養。

六月、瞬く間の半年、夏越祭、わぬけさま、各神社が茅の輪を立て、我々は大祓いに出掛け半年の無事に感謝し、暑さに負けない様に祈りを込めて、後の半年

を無事に過ごせるようお願いするのである。

七月、七夕さま、子供の頃はこの日が来ると、軒端に笹竹を二本立て、それに藁縄を張り渡して、茄子や鬼灯、糸や芋の葉に玉の露を包んで莊り、その露で墨を摺り筆を取って、字や針仕事などの上達を願って短冊を竹枝に吊るしたものであった。願望にはあれこれと欲しい物と、自分自身の高揚を希っての事柄とがあったのだが、これを伝える者が居ない淋しさを感じている。そして久しく中断したままである。今は幼稚園で幼児達のお願い事の星まつりとなっている、それはそれで微笑ましく可愛いものだ、こうして家々での年中行事の文化も少しづつ変化しつつある。

さて、七月は私の誕生月である。昨年両眼の手術を受けた、丁度一年を経過したが、細やかな点の改良は少ないが広い意味では以前より見えている、細字の読み書きは聊か不自由である。年を取れば機能も身体も衰えるのは当然の事、テレビ通販などで若返り美肌化粧品やサプリメントなど多種多様な商品の宣伝販売を行っているが、まあ程々にしておこう。

精神的にはむしろ年を重ねる毎に、内面の豊かさや奥深さを内蔵出来るのではと思う。老いは成熟であると誰かが云った事を思い出した。

八月、梅雨も明け本格的な夏となる。連日の猛暑に加え豪雨による災害も多く、厳しい事である。被害の少ない事を祈る。

ともあれ、よさこい祭りは開催六十周年で、高知最大の夏のイベントである。県内外の踊子隊が鳴子を振って踊っている時の笑顔、皆楽しそうで、生き生きと輝いている、見ている方も元気をもらえてうれしい。あのエネルギーと、ファイトは素晴らしい。こうして八月も終わろうとしている。

九月初めに私にとって大切な行事が待っている。まだまだ思う事は沢山あるが、まとまらない。もとより文章は苦手で、I女に押し切られてペンを取った次第なれど、八十歳を目前に我が身と対峙しながら日頃の雑感を日記から拾い書とした。

今後は九十歳を目標に誠実に自然体で寸陰を重ねて行けたらと細こまやかな希いを記して拙筆とする。

皆様方もどうかお元気で過ごして下さい。ご健勝を念じています。 合掌

